「なんで 今日は 雨なんだろう？」　トリスタンが まどぎわに 立って 嵐を 見ながら、不満そうに 言いました。「デリックと 外で 遊びたかったのに。これじゃあ、遊べないよ。」

「じゃあ、何か いっしょに しようか？」と、ジェイクおじいちゃんが 言いました。

「どんな こと？」

「そうだな、もし お前が よければ、わたしが・・・」

「お話を して くれるの？」　待ってましたと ばかりに、トリスタンが 言いました。

「そうだよ。嵐についての お話だ。まずは 暖かい ココアを 作って 来るから、それから お話を して あげよう。」

「やったあ！」と、トリスタン。

もう 1週間も 天気が 悪くて、嵐が 続いています。
積極思考建設会社は、工事を 続けるのが 次第に
むずかしく なって きました。地面は、ここも かしこも
ぬかるんで います。建設重機たちは、車輪が ぬかるみに
はまらないように、必死でした。

天気が くずれて 5日目の 金曜日は、今までに 見た こともないほどの 悪天候でした。

クレーン車の アームは 強風で ゆっさゆっさと あおられ、ふき飛ばされないように 他の 重機たちが ささえて
あげなければ ならないほどに なりました。

嵐で ダメージを 受けないように するのが やっとで、
工事は ほとんど 進まない 状態でした。

事故が 起こると いけないので、監督さんは 重機たちに、
今日は もう 休むようにと 言いました。

「嵐が やむまで、工事は いったん 中止だ！」
嵐の 音で かき消されないように、監督さんは 大声を
張り上げました。「みんな、後を 片付けて、車庫に
もどるんだ。明日の 天気が どう なるか、様子を 見よう。」

みんな、嵐が さらに ひどく なる 前に 帰ろうと、必死で片付け作業に 取りかかりました。

「助けて！　助けて！」

すさまじい 嵐の 中で、助けを よぶ 声が かすかに 聞こえてきました。

「みんな、どうしたのか、見に 行こう。
ローリーさんみたいだ。」と、ミニショベルが 言いました。

工事現場の 外れで、ローリーローダーが 立ち往生して助けを 求めていました。現場を 出ようと した 時、砂利道ですべって、土手に 出て しまったのです。ぬかるみが 深くて、ぬけ出られないで います。どんなに がんばっても、全然動けません。車輪が 空回りして、どろばかりが そこら中に飛び散っています。

重機車両たちが、一体 何事かと、土手の 周りに 集まって来ました。

「お願い、だれか、助けて！」と、ローリーが さけびました。
「早く 帰って、洗車して もらいたいわ。」

「もう１回、やってごらんよ。」と、クラッシャーが言いました。

「無理よ。」と、ローリー。

「とにかく 試して みなよ。今度は うまく いくかも。」

ローリーは 全速力で 車輪を 回しました。それでも、ぬかるみから 出られるどころか、どろが 周り中に 飛び散っただけでした。

「いやだ！　こっちまで どろだらけじゃない。すでに きたない 上に、どろまで かぶるなんて！」と、ロードマーカーが さけびました。

「ごめんなさい。」　ローリーが 悲しそうに 言いました。

「助けるのは 無理だと 思うよ、ローリー。嵐が 過ぎ去って、ぬかるみが 少し 固まるまで 待つしか ないかも。」と、クラッシャーが 言いました。

そこへ、ロードローラーが ゴロゴロと やって来て 言いました。「ロードマーカーさん、もう 帰れるかい？」

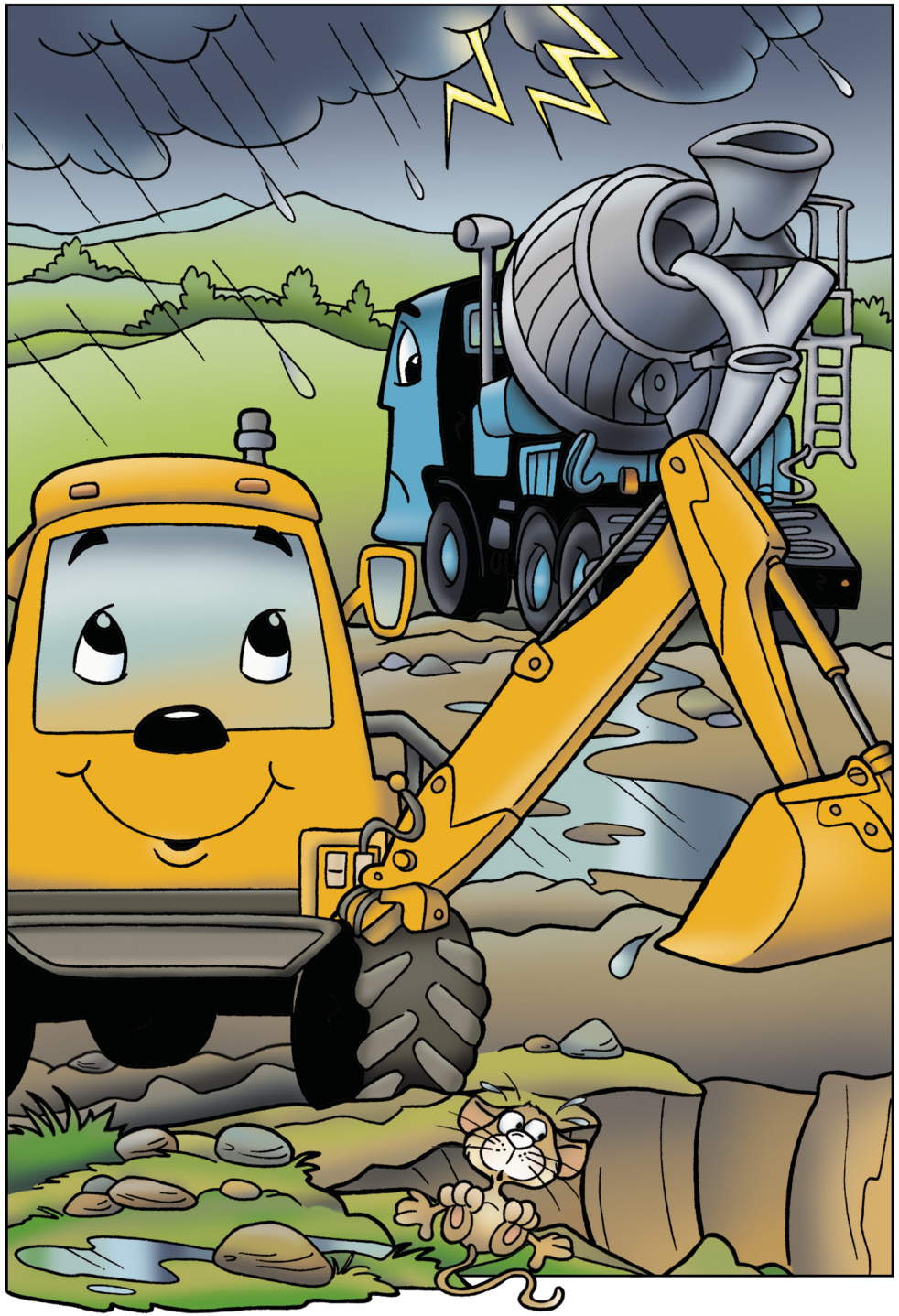
「ええ。ひどく よごれて しまったわ。ローリーに どろを かけられたのよ。」と、ロードマーカーが 泣き言を 言いました。

「そりゃあ、ひどいじゃ ないか。」　ロードローラーが 顔を しかめて 言いました。

「だけど、ローリーさんは ぬかるみに はまってるんだ。わざと やった わけじゃ ないよ。」と、ミニショベルが 言いました。

「ぼくは、どろも よごれも イヤだね。ロードマーカーさんが 帰る 準備が できてるなら、もう 帰るよ。」　ロードローラーが ふきげんそうに 言いました。

ところが、帰ろうと 向きを 変えた 時、ローラーが 土手の はしで すべって、ローリーさんの となりまで ずり落ち、同じ ぬかるみに はまって しまいました。



「何てこと！」　ロードマーカーが 悲鳴を 上げました。
ロードローラーを 助けようと して、ロードマーカーまで、
すべって ぬかるみに はまって しまったのです。ローリーと、
ロードローラーと、ロードマーカーが みんな、深い ぬかるみに
はまって、動けなく なって しまいました。

ロードローラーは、こんな ことに なった ことで 腹を
立てました。

「ローリーローダーさん！　もし あなたが 不注意にも
こんな ことに なって いなければ、ぼくたちは 今ごろ、
こんな ことには なって いなかったのですよ！」と、
ロードローラーが どなりました。

「ローリーさんの せいじゃ ないよ。」と、クラッシャー。

「巻きぞえに なって ぬかるみに はまらない うちに、
ぼくは もう 帰るよ。」と、コンクリート・ミキサーが
言いました。

「ぼくたちを 置いてきぼりに する 気かい！」
ロードローラーが さけびました.

「だけど、ぼくに 何が できるって 言うんだい？」と、
ミキサー。

「助けて くれよ！」

「それで、ぼくも 君たちと いっしょに ぬかるみに
はまれって ことかい？　そりゃ、ごめんだね！」

「監督さんなら、どうしたら いいか 分かるんじゃ
ないかしら。」と、ローリー。

「そうだね。だけど 監督さんは、もう 15分も 前に
帰っちゃったんだ。」　ミニショベルが 言いました。

「一体、どうしたら いいの？」　ロードマーカーが 泣き言を言いました。

「みんなで 協力して、君たち 3台を 引き上げるしか ないな。」この 様子を、ずっと 静かに 見守って いた クレーン車の クランクが 言いました。

「やる 価値 ないよ。」と、ミキサー。

「だけど、ぼくたちは みんな、仲間なんだ。仲間って いうのは、おたがいに 助け合う ものだろ。もし 君が 困難な 状況に なって いたら、助けてほしいって 思うんじゃ ないかい？」

「クランクの 言う 通りだね。ぼくに できる ことが あれば、手を貸すよ。」と、クラッシャーが 言いました。

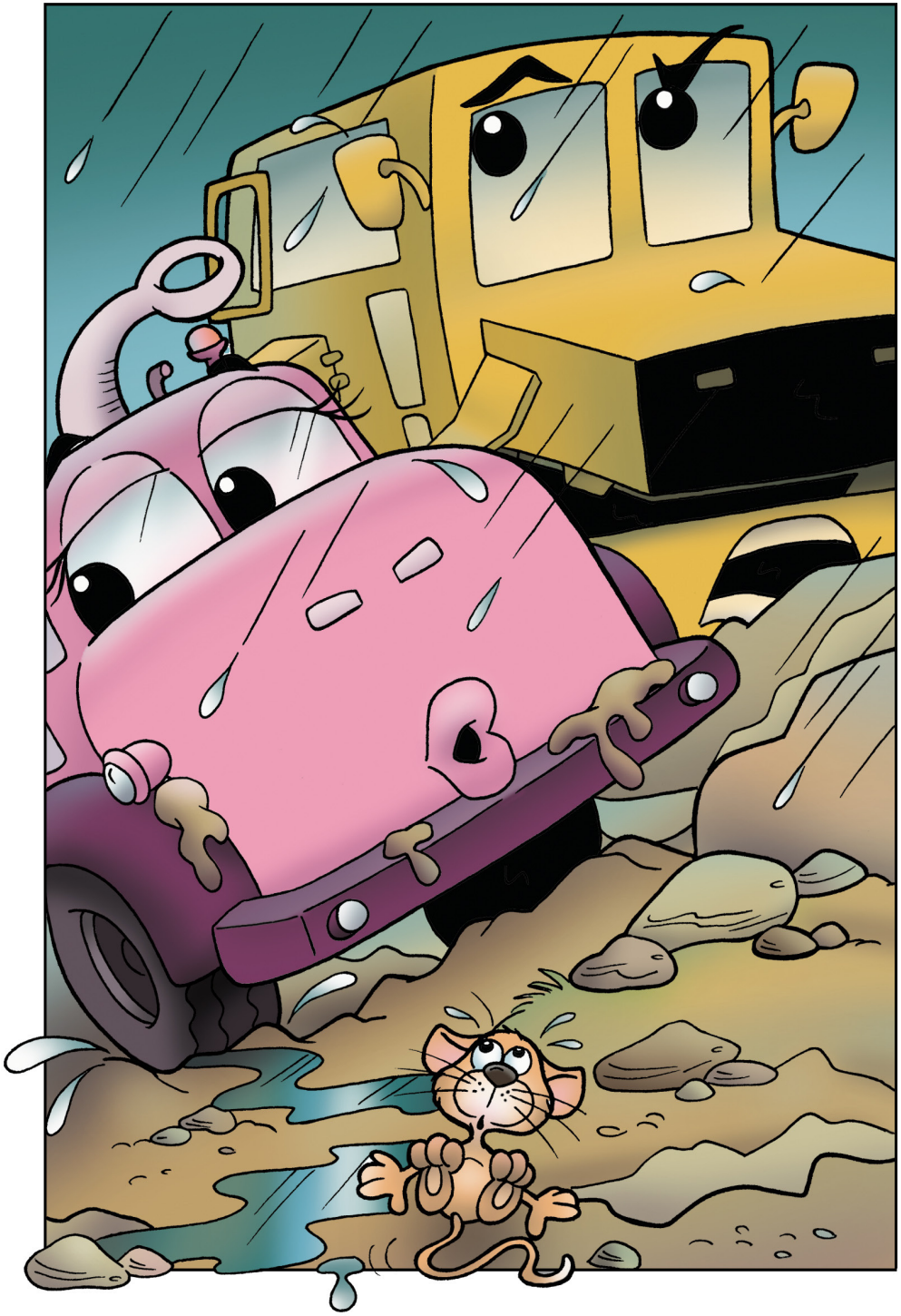
「ぼくも。」と、ミニショベル。

「分かった。ぼくも 手伝うよ。どうしたら いい？」と、ミキサーも 言いました。

「これは どうかな。まず、ミニショベル君、ドウザー君を よんできて くれないか？　ドウザーの 手を 借りたいんだ。」と、クランクが 言いました。

土砂降りの 中にも かかわらず、重機車両の みんなは、不運な 3台の 仲間を ぬかるみの 中から 助け出すための 計画を 立てました。

ミニショベルは 長い アームを 使って、どろを できるだけ かき出しました。クラッシャーは 板を 見つけて きて、それを ローリーの 車輪の 前に 置きました。ローリーに ロープを かけ、コンクリート・ミキサーが それを 引っ張る 間、ぬかるみに しずまない クローラーを 備えた ブルドーザーは、ふん張りながら 力いっぱい ローリーを おしました。この 救出劇の 連係プレーを、クランクが 導きました。



みんなが 力を 合わせて一生けん命 引っ張ったり おしたり した 結果、やっとの ことで、ローリーが ぬかるみから ぬけ出す ことが できました。その後 みんなは、ロードマーカーと ロードローラーも 助け出しました。

「本当に ありがとう。みんなみたいな 仲間が いて、よかったわ。」と、ローリー。

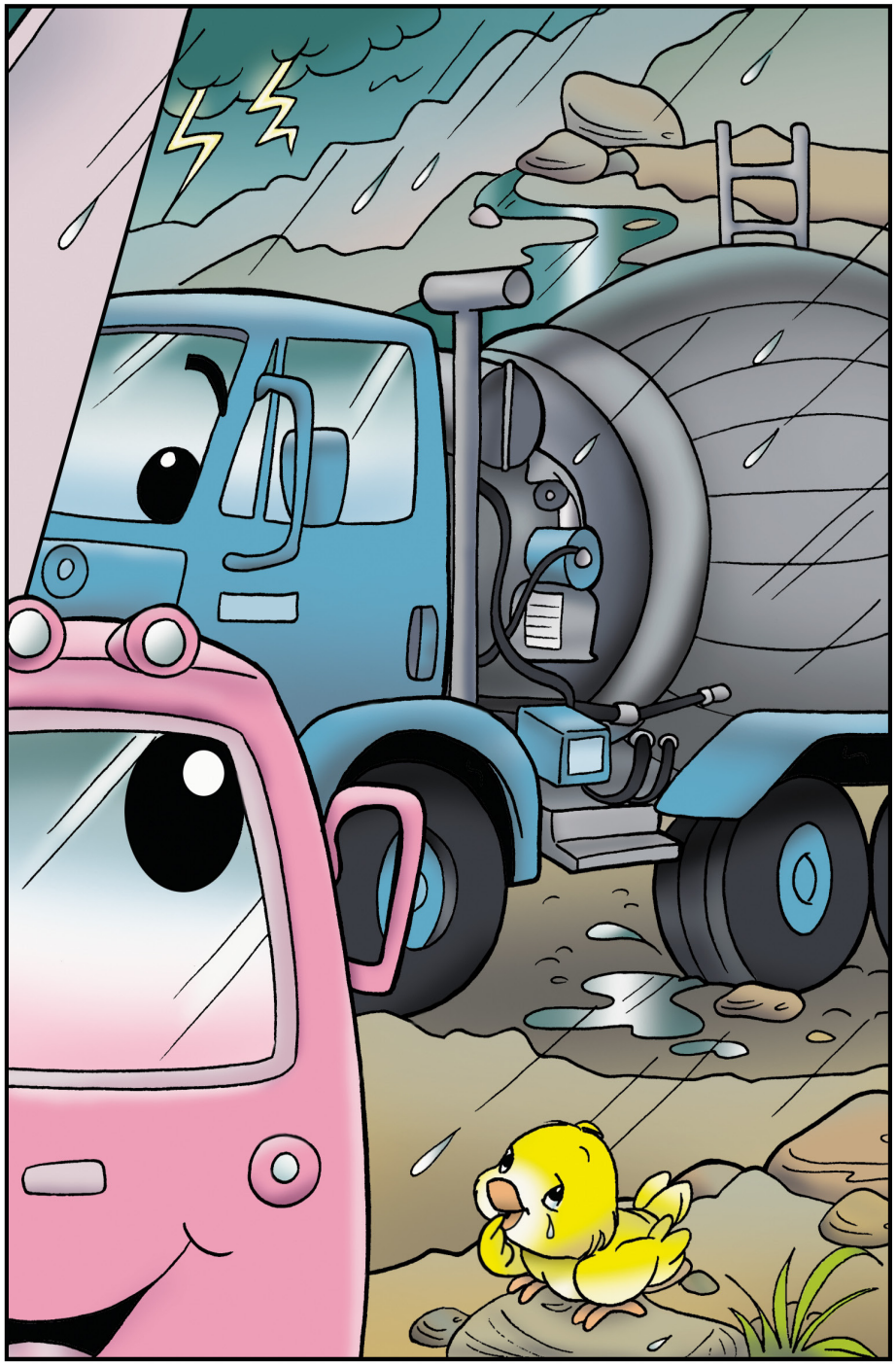
「どう いたしまして。」と、クランク。

「意地悪を 言って ごめんなさい、ローリー。」ロードマーカーが すまなさそうに あやまりました。「よごれたく ないからって 自分の ことばかり 考えるんじゃなくて、どうしたら あなたを 助けられるかを 考えるべきだったのね。わたしって、浅はかだったわ。」

「いいのよ。気に しないで。」と、ローリー。

「ぼくも、腹を 立てたり して、悪かったよ。ゆるして くれるかい？　今度、もし だれかが こまった ことに なったら、それが 自分だったら どうして ほしいかって、考える ことに するよ。そうすれば、何かの 助けに なれるかも しれないからね。」と、ロードローラーが 言いました。

「そうね。気に しなくて いいわよ。今週は みんな、大変だったもの。」と、ローリーが 言いました。



「さあ みんな、ぬかるみから ぬけ出られた ところで、帰ると しよう。」と、ドウザーが 言いました。そして みんなは、暴風雨から のがれるために、車庫へ 向かったのでした。

「クランクと クラッシャーと ミニショベルと ドウザーと ミキサーが 仲間を 助けられて、よかったね。」と、トリスタンが 言いました。

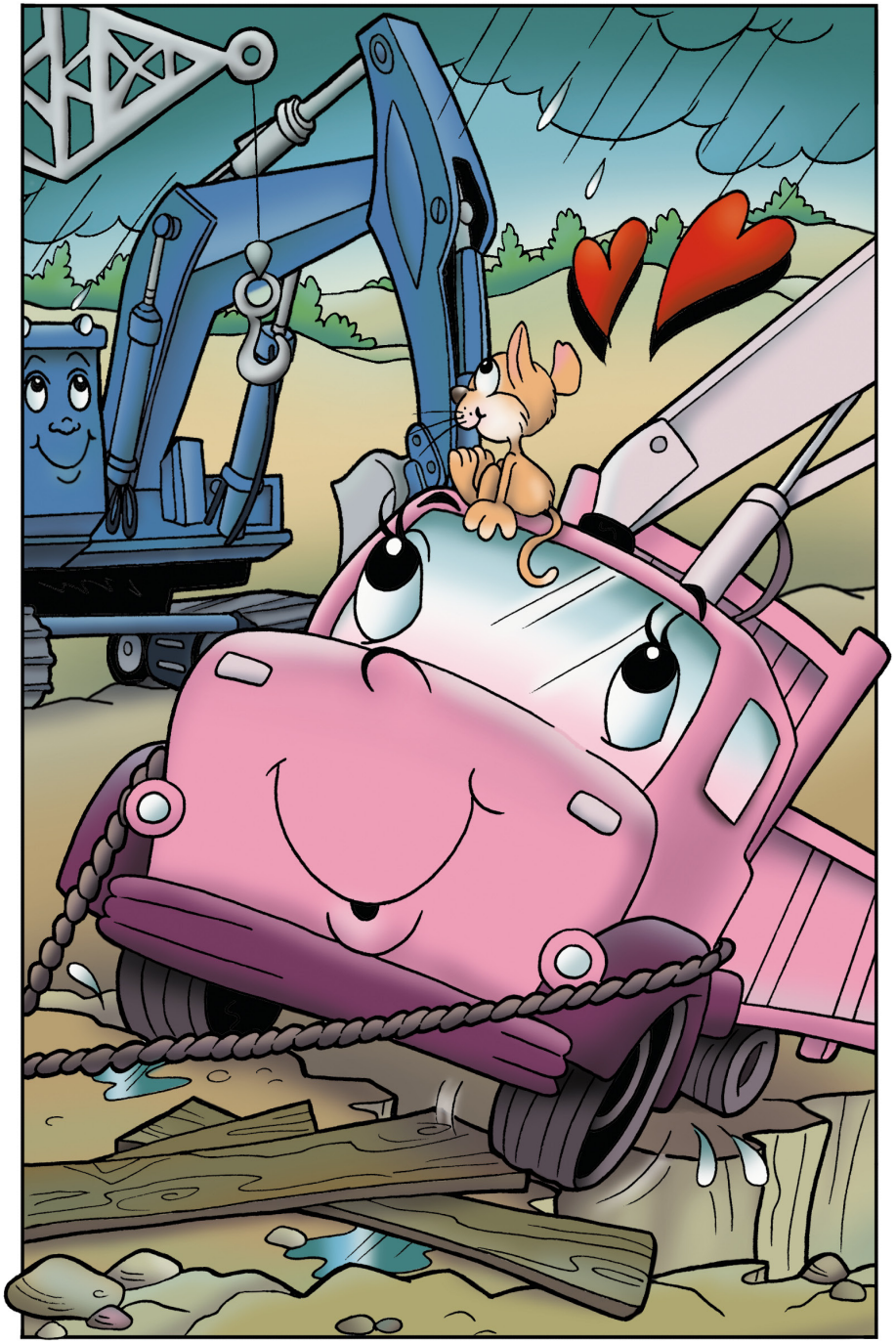
「本当にね。お前も いつか、こまった 状況に なって 助けが 必要に なる ことが あるかも しれない。友だちに 助けが 必要な 時、ふだんから 思いやりを 持って 助けに なって あげて いれば、お前に 助けが 必要に なった 時も、友だちは 助けて くれるよ。」と、ジェイクおじいちゃんが 言いました。

「見て、おじいちゃん。雨が やんだよ。空に にじが 出てる！」トリスタンが 声を 上げました。「今から 外で 遊んでも いい？」

「もちろんだよ。だが、ちゃんと 長ぐつを はいて 行くんだぞ。水たまりだらけだからな。」

「おじいちゃん、お話を してくれて、ありがとう。」

教訓：自分が して ほしいように 他の 人にも して あげたり、手を 貸して あげるのは、大切な ことです。周りの 人たちに 示す やさしさと 友情は、自分にも 返ってくる ものです。



文：カチューシャ・ジュスティ　絵：アグネス・リメア　彩色：ダグ・カルダー　デザイン：ロイ・エバンス　掲載：マイ・ワンダー・スタジオ
Copyright © 2008年、オーロラ・プロダクションズAG、スイス、不許複製
“Grandpa Jake’s Storybook: Crew and Co.: Rain and Rumble”--Japanese